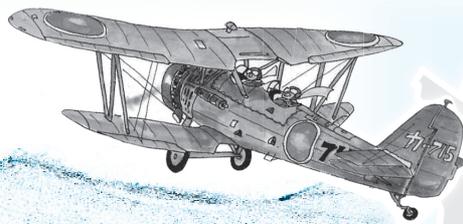


予科練 平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関するお話しや写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。

幾

多くの出会いと別れを包み込んで、桜の季節がまるで夢を見ていたかのよう過ぎ去り、勢いよく現実に戻っていく日々がやってきます。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

●土空の天使（前半）

5月12日は、フローレンス・ナイチンゲールの誕生日です。彼女は1820年自ら志願してクリミア戦争に従軍し、イギリス軍の野戦病院にて、それまで不衛生だった病室環境を改善し、傷病兵の看護をしました。その献身的な姿から『クリミアの天使』と呼ばれた彼女はまた、政府や軍を相手に、医療制度や病院の改善を訴え続けた戦う女性でもありました。その姿はアンリ・デュナンを動かし、やがては国際赤十字社やノーベル平和賞の設立へとつながっていくのです。彼女がクリミア戦争から帰った3年後に執筆した『看護覚え書』は、現在でも古典として読み継がれ、看護を志す多くの人たちに導いています。

今月号は、昭和20（1945）年6月10日、阿見の空襲を体験した看護婦さんたちの体験談をご紹介します。

予科練平和記念館だよりNo17でも少し触れましたが、予科練生（海軍飛行予科練習生・少年航空兵のこと）の教育を行っていた土浦海軍航空隊（土空・現在の陸上自衛隊武器学校一帯）の隊内には病院があり、軍医と衛生兵が隊員の健康管理を行っていました。しかし昭和20年2月、激戦の末硫黄島が陥落、翌3月には東京・大阪など主要都市が空襲を受けることになる

と、衛生兵の人手が不足するようになりました。そのような状況の中で、土空に初めて看護婦が着任することになったのです。

お話をしてくださった森戸すゑさん、角田しづ子さん、栗原志津子さんは東海村にあった国立療養所村松晴嵐荘看護婦養成所の第8回生で、卒業後はインドネシア・スラウエシ島マカッサルにある研究所などに配属になる予定でしたが船がなく、母校で待機していたところに土空赴任が決まったのでした。

隊内は男ばかりだったため、彼女たちは青宿地区にあった二階建ての民家を寄宿舍

とし、そこから毎日列を組んで土空に通っていました。食事は土空内の食堂にて兵と同じものを食べ、一週間に一度程度大福やキャラメルなどの配給があったそうです。皆10代後半から20代前半、予科練生にとってはお姉さんのような存在でした。そして彼女たちも、そんな弟のような予科練生のために骨身を惜しまず働きました。

運命の昭和20年6月10日、土空での勤務にも慣れてきたころでした。その日は日曜日でしたが、いつものように食事をするため隊に向かった彼女たちは、隊門のところで大勢の面会人が来ているのを目撃しました。それは、予科練生が特攻隊の訓練にいくというので、面会に訪れた家族や知人たちでした。

そして、食事をしようとしたその時、空襲の警戒警報がでたそうです。空を見上げた彼女たちは飛行機を目撃、太陽の光を受けるB29の機体を見て、思わず「わあ、きれいだ」と思ったのだそうです。しかし…。

「…落とすんですよ、爆弾。それは見えた。そしたら「け

が人が発生した」っていつて。」急いで救出、看護に駆けつけようとする彼女たちを機銃掃射が襲います。「あれは見た。私ももう…ババババババババってね。隣でね、もう。だって飛行機が目の前にいるんだもんね。あれは怖かった。」もう狙われそうでした。たんぼの茂みの中をくぐりながら、青宿の防空壕から適正部（現在の土浦三高）までガ―ゼ缶とかいろいろ持って走ってるんですよ。もう、「上から狙われてるよ！」なんて…。」

そう言っ、元土空の天使3人は、それまでのひまわりのような笑顔を曇らせました。（続きます）



▲土空に赴任した看護婦（写真提供：森戸すゑさん／小美玉市在住）